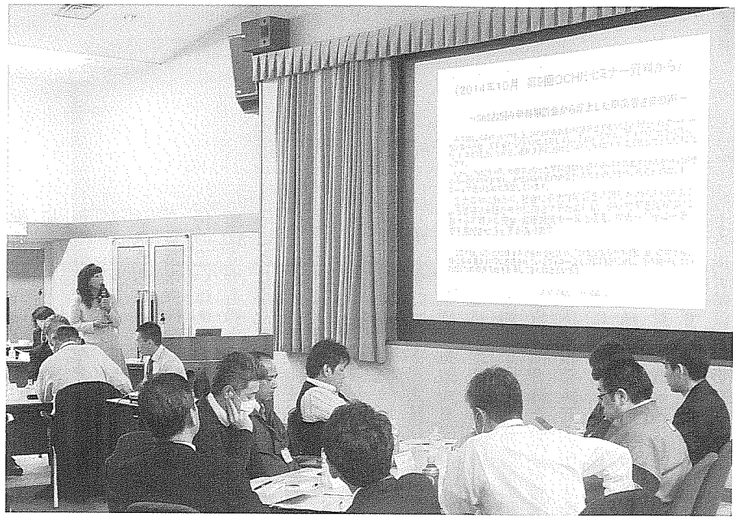
SEMINAR REPORT

安全と健康を推進する協議会「両輪会」セミナーより

社内のSAS対策Q&Aの紹介と居眠り運転事故対策をディスカッション



NPO法人ヘルスケアネットワーク（以下OCHIS）では、交通関係の事業者を集め、安全・健康管理についての情報交換会として「両輪会」を定期的に開いている。ドライバーの居眠り運転が社会問題化する中、運輸やバス、タクシー会社などの管理者らに参加してもらい「急増する居眠り運転事故の背景を探る～事例による事故原因の究明と対応法～」をテーマに3月18日、大阪府トラック総合会館で16回目の両輪会を開催した。

SAS対策11年目を迎えて

作本貞子さん（OCHIS副理事長、両輪会代表）

●SASへの意識向上

OCHISは、居眠り運転事故と関連が深いとされる「睡眠時無呼吸症候群」（以下SAS）」対策事業をスタートさせ、今年で11年目を迎える。このためSAS対策事業スタート10周年記念誌として、SASに関する詳しい解説などを盛り込んだ冊子、「社内で行うSASスクリーニング検査後のQ&A」を、今年6～7月にも発刊する予定だ。

作本代表は平成26年度のSAS検査の申し込みが前年度の約2倍となる約1万5000人にも上ったことに触れ、急増の背景として関係者のSASに対する意識が向上してきた結果と分析した。

また平成15年に起きた山陽新幹線の運転士によるSASが原因のオーバーラン事件直後、国土交通省からSASに注意を呼びかけるマニュアルが出てから、これまでのSASをめぐる動向について振り返り、運輸業界におけるSAS対策は徐々に浸透してきたと一定の評価をした。

しかし平成24年4月に関越自動車道で乗客7人が死亡するなどしたバス事故では、事故後にドライバーのSASが発覚したことや、いまだにSAS検査を実施していない事業者が多く上ることなどを指摘する。

その上で、重大事故につながるSASによる居眠り運転を防止するためには、SASの検査をより浸透させ、実施後のドライバーへのサポートまで行うことが重要と訴えた。

●社内のSAS対策Q&Aを紹介

作本代表は、OCHISが毎月、東京と大阪で定期的に開催しているSASについての悩み相談会に寄せられる質問に対する回答として、国土交通省にも情報提供している内容から紹介した。

「SASの啓発や教育の手法を教えてほしい」という問いには、「SASと生活習慣病、健康起因事故との関連性などについて周知いただくのが大前提」とした。「検査を受けたいが、予算が少ない」といった悩みには、「一度に受診が難しい場合は、事故やヒヤリハットが多い、リスクの高い人から優先順位を決めること」とアドバイスした。

「重症のSASと判定された場合の会社としての対応」については、「治療をすれば睡眠時間が5時間以下の非SAS者よりもむしろ安全だともいわれ、重要なことは早急に治療を開始すること」とした。

●居眠り運転対策を意見交換

後半はグループディスカッションの時間が設けられた。まずは実際に起こった居眠り運転が原因の事故事例を、ドライブレコーダーの映像を交えて紹介された。その後、5つのテーブルごとに分かれた出席者が事故対策について意見を交換し合った。

まとめとして行われた各班の発表では、「停まったら必ずサイドブレーキを引く」「眠くなったら仮眠を取る」「健康診断でSASかどうか調べる」といった意見が出た。

一方、「賃金が安くドライバー不足」「労働時間の見直しが必要」といった悩みも寄せられ、業界が抱える課題も浮き彫りとなった。

このほか社内だけでなく「睡眠が十分取れるように家族に協力を依頼する」といった声が聞かれた。自社に取り入れたい対策としては、ドライブレコーダーを増やすことや衝突軽減防止装置を取り入れるなど、ハード面の整備充実を挙げる意見が出た。

グループディスカッションの様子

グループでまとめた意見を発表する出席者

会場の一角に展示されたSAS精密検査機器